



令和5年度中学校武道授業（なぎなた）指導法研究事業

令和5年度中学校武道授業（なぎなた）指導法研究事業（主催＝日本武道館・全日本なぎなた連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁）は、1月27・28日、研究者4名と全日本なぎなた連盟事務局1名が出席して日本武道館大会議室ならびに第二小道場にて実施された。

本事業では中学校保健体育なぎなた授業の実践紹介と授業協力者の養成方法、また、今後のなぎなた授業についての可能性について検討を行った。

■1日目（1月27日）

開講式では、今浦千信^{いまうら ちのぶ}全日本なぎなた連盟常務理事と沢登英徳^{さわと ひでのり}日本武道館振興課長補佐が主催者挨拶をした。

第一講、小椋^{おぐら}かおり研究者が「なぎなた授業を通して身につけたいこと」をテーマに、勤務校である大阪府河内長野市立千代田中学校でのなぎなた授業実施までの経緯を以下のように紹介した。

日本武道協議会発行の指導書や全日本なぎなた連盟の授業ノートを活用することで、なぎなた未経験の教員でも授業ができた。これまで武道授業では柔道を実施していた。コロナ禍を経て、なぎなたを実施するようになって今年度で5年目を迎えた。用具も教材も同じ物を使用できること、指導内容についても保健体育科教諭全員で共有できること、授業中の生徒への指導で、きめ細やかなケアができることがよかった。

球技大会を実施する学校は多いと思うが、本校では授業の延長として「学年選抜なぎなた大会」を開催し、成果を発表する場を設けた。選手集めから大会準備・運営、審判まで全てを生徒に任せた。普段はあまり人前に出ることをしない生徒が優勝したことで学校生活でも一目置かれるようになった。なぎなたは、ほとんどの生徒が初心者なので同じスタートラインで始めることができる。形が中心で、段階的に指導していくことが可能である。生徒を置き去りにすることなく全体

でレベルアップできる教材だと考える。

次に今浦研究者から香川県琴平町立琴平中学校、山形市立第七中学校、大阪市立墨江丘中学校の授業実践内容の報告があった。

「どの学校でも楽しかったと肯定的な意見が多かった。しかし、過疎化が進んでいる地域や指導者不足、教員の転勤などで継続実施が難しい状況にある。現在、連盟では6時間想定単元計画（例）を提示しているが、柔道・剣道に比べて、なぎなたは資料が少ないため、現場の教員の教材研究が進んでいない。初心者先生に負担をかけずに、短時間で生徒になぎなたの楽しさに触れてもらうことができないか。生徒には復習の時間より新しいことに挑戦させる機会を増やし、飽きさせない授業展開を検討していきたい」

続いて、なぎなたコーチI以上保有の全日本なぎなた連盟「授業協力者」として登録している約450名の活用方法を検討した。また、今後は学校なぎなた授業でのサポート役を担っていくことを再認識させるため、日本武道館と共催の全日本なぎなた指導者研修会を活用することとした。

まとめとして、森田美穂^{もりた みほ}研究者が「授業協力者養成講習会・コーディネーター研修会を通じた今後のなぎなた授業の可能性について」と題し、自身が参加した他武道の研修会での教材紹介など、なぎなたと比較しながら現状について報告した。

■2日目（1月28日）

この日は稽古着に着替え、体さばきと振りのバランスを考えながら授業で実践できるリズムなぎなたの構成案を検討した。生徒が持ち替えるタイミング、隊形の作り方、動く方向などグループの人数に応じて工夫する要素を残して構成した例をまとめた。

閉講式では、今浦研究者が講評を、最後に沢登課長補佐が主催者挨拶を行い、全日程を終了した。